「寄田三尺棒踊り」伝承活動の取組

１　**学校名**　　薩摩川内市立寄田小学校

２　**学年・人数**　小学１年生から６年生（計１６人）

３　**場所・日時**

(1)　練習の場所・日時

寄田地区コミュニティーセンター（５月～6月）午後7:30～8:30　２週間

(2)　発表の場所・日時

新田神社御田植際（６月第１日曜日）

４　**伝承・活用に取り組んでいる郷土芸能，伝統行事や史跡について**

(1)　名称

寄田三尺棒踊り（よりたさんじゃくぼうおどり）

(2)　由来

鎌倉時代や戦国時代に始まったといわれる。各地で戦乱が相次ぎ，農地荒廃，賦役頻繁（ふえきひんぱん）自衛のための武器所有も許されずという有様で農民は，６尺または３尺の棒で護身するしかなかった。３尺棒つまり乳の高さまでの棒を乳切り木（ちちぎりき，川内では「ちぎいぼ」）という物を担ぎ，護身に用いた。もともと武術の一種とも言われるが，一説には田打ち行事の一つで，地面をとんとん突くのは田開きで虫追いだとする農耕儀礼説もある。終戦後しばらく途絶えていたが，１９６３年（昭和３８年）６月１７日，県の無形民俗文化財に指定され，その伝統を受け継ぎ，土地の青年団が中心となって昭和４６年に棒踊りが復活した。

(3)　構成等

３列縦隊，６人１組で踊り，３～４組で打ち合い踊る。紺絣（こんかすり）に白襷（しろたすき）をかけ，紺の足袋（たび）にわらじ，白鉢巻き（しろはちまき）をし，長さ３尺の木刀を持って勇壮に踊る。歌い手の「おーせーろー」の歌に合わせと踊り子が気勢を上げながら踊りの体形を整える。「さーさーさ」，の踊り出しの歌と同時に，「ほい」と踊り子は小手をかざして木刀を使いながら踊り始め，６人がらみ，３人がらみ，出棒＝受身の型，逆棒＝攻撃の型とからませて威勢よく踊る。

５　**保存会や地域との連携の具体**

年１回，毎年６月第１日曜日に行われる新田神社の御田植祭において奉納を行っている。

御田植祭の１か月前に，地区コミュニティーセンターで役員会を開き，練習日程やおどり参加者の呼びかけ等について話し合い後，２週間毎晩午後７時３０分から１時間お師匠さんたちの指導により，子どもたちの練習がある。小学１年生や特認生（小規模校入学特別認可制度で他の小学校から通学している子）で初めて参加する子どもには，特にお師匠さんが１対１で念入りに指導してくださる。熱心な指導と子どもたちの頑張りで，本番までに何とか全員踊れるようになる。この間，毎晩保護者は子どもの送り迎えをし，練習の間もじっと見守る。このような保護者や地域の協力体制ができており，子どもたちも安心して練習に取り組むこと

ができる。

6　文化財伝承・活用の取組の工夫した点

(1)　コミュニケーション科での取り組み

薩摩川内市が進めている小中一貫教育の学習，コミュニケーション科（地域の自然や文化等を調べ伝え合う学習活動）の中で，小学３・４年生は，地域に伝わる伝統芸能「寄田三尺棒踊り」を取り上げ，棒おどり保存会のお師匠さんや地域の方にインタビューしたり，自分たちで調べたりして，棒踊りの歴史や由来，踊り方などを調べ，高江中校区内の３つの小学校が集まって開かれる集合学習でのコミュニケーション科発表会で劇にして発表を行った。

(2)　運動会等での発表

本年度は，閉校記念の最後の運動会であることから，保存会の方々の協力の下，最後の運動会に地域内外からかけつけた多くの参加者の前で棒踊りを披露し，大変好評であった。多くの機会に発表の場を設けることで，伝統文化の継承と理解につながっている。

(3)　情報発信としての学校の役割

保存会のメンバーは，地区コミュニティー協議会長，各自治会長，PTA 会長，指導者等で組織される。話し合いには，学校代表として，校長，教頭も加わる。話し合われたことは，保護者にプリントして伝え，参加を呼びかけている。また，踊りの様子を写真やビデオに撮影して，新聞や学校便り，PTA 新聞等に子どもたちの作文と共に情報発信している。

7　取組の様子（練習状況，発表の場等）

【練習風景】

【新田神社御田植際での奉納】

【寄田ふるさと大運動会での発表】

【高齢者福祉施設での発表】

8　参加児童生徒・保護者・保存会・教職員等の感想・意見

＜小学４年生＞

私は今年で３年目ですが，新田神社で踊るときが一番どきどきします。それは，お客さんも多いし，いつもは踊れない場所で踊るからです。いよいよ本番，おじさんのかけ声で始まりました。「サーサーサ」と大きな声が聞こえました。私は続けて「ホイ」とみんなの声に合わせて言いました。すると，みんなの声が一つになったようでした。踊り終わった後は，がんばってよかったなと思いました。来年も練習をがんばって，今年よりももっとうまく踊りたいです。

＜特認生保護者＞

「えいっ，やぁー」私が帰宅すると家のリビングから元気なかけ声が聞こえてきます。かけ声の主は，四年生の兄と新一年生の妹です。最初で最後の寄田小学校での一年間となるので，子どもたちの意見を尊重して寄田棒踊りに参加してみました。特に一年生の妹は大丈夫かな？て心配していましたが，妻のおかげで毎日のように参加できていたようで子どもたちは毎日充実していました。本番当日の御田植祭で，初めてちゃんと見ましたが，兄はクールに，妹は情熱的に棒踊りを楽しんでいたように感じました。二人の充実感溢れた顔がとても印象に残っています。頼りになる先輩と素晴らしいお師匠さんに囲まれて，かけがえのない経験をさせていただきました。ありがとうございました。今日もリビングでは「えいっ，やぁー」のかけ声が来年に向けて響いています。

＜棒踊り保存会会長＞

三尺棒踊りは昭和４６年に青年団が中心となり復活しました。今年で４０年目になります。子どもたちとの出会いは昭和５０年代後半に学校の「ゆとり」の時間に郷土に伝わるものを勉強するということで始まり，今ではその当時の子どもたちが大人になり結婚し，子どもが生まれ，また近年では特認校制度で多くの子どもたちが寄田小学校へ転校し，その子どもたちが棒踊りを踊ってくれています。

寄田町では少子高齢化が急速に進み，保存会の維持に苦しんでおりますが，小・中・高生たちが棒踊りの保存活動に参加してくれて伝承することができています。保存会は祖父母，父母，子どもの三世代が会員で保存会を支えています。今後は我々棒踊り保存会が寄田町の心の拠り所となり，校区をあげて鹿児島県指定無形文化財「新田神社お田植祭に伴う芸能（棒踊り）」を後世へ伝えていきたいと思います。

＜教職員＞

近年，少子高齢化により，地元の青年も数が減り，青年だけではどうしても踊り手が不足している。このような現状から，小学生をはじめ，中学生・高校生も貴重な踊りの担い手になっている。大人は男性のみであるが，子どもたちは男女問わず参加している。地元の子どもだけでなく，特認生の卒業生も忙しい中にも，この期間だけは都合のつく日には練習に参加してくれている。このように保存会の組織がしっかりしており，指導者や保護者，地域の協力が得られているので，棒踊りの伝承はしばらく続いていくと思われる。

しかしながら，寄田小学校は，平成２３年度末で閉校となり，平成２４年４月からは水引小学校に統合となる。地元児童は地域に残るが，特認校制度は廃止となるため，児童数は激減する。そのような中で，いかに小中高生の踊り手を確保し，踊りを継承していくかが課題となる。

また，指導者である方々も６０代，７０代であり，年々高齢化していく。指導者の世代交代も図りながら，若い世代に引き継いで行く取り組みが急務である。幸い，本年度参加した特認生の中には来年もぜひ踊りたいという児童もおり，明るい希望も見える。これからも，県無形民俗文化財である伝統芸能の継承活動に地域一体となって取り組んでほしい。

（参考資料）南日本新聞掲載

2011年(平成23年)7月10日　日曜日　こども

南日本こども新聞

おしえて宝物

寄田三尺棒踊り

薩摩川内市・寄田小

薩摩川内市立寄田小学校は今年、創立131年を迎える伝統ある学校です。全校児童は16人。学校の周りには山や川があり、とても自然環境に恵まれています。

学校の宝物は、毎年1回、新田神社のお田植え祭に合わせて、地元の人たちと踊る「寄田三尺棒踊り」です。これは鎌倉時代から続く伝統芸能で、五穀豊穣を願って踊ります。

今年は新1年生2人を含む14人が参加。踊りは長さ約90センチの木刀を持ち、6人1組で歌い手の歌に合わせて、地面を棒でたたいたり、互いの木刀を打ち合ったりします。6月5日の本番に向けて、2週間前から地元の「棒踊り保存会」の方々の指導の下、一生懸命練習を続けました。

本番は、寄田小の先輩方から受け継いだ白い鉢巻きや紺色の着物の衣装を着て踊りました。今年は地区の公民館や神社、学校など十数カ所で踊りを披露。雨が降っていましたが、みんな最後まで全力で踊りました。

寄田小は来年3月で閉校になりますが、地域と寄田小の伝統行事である「寄田三尺棒踊り」はこれからも残していきたいです。（6年・村田茉由）